



「年男」の抱負 五度目の節目に立つ

| すず小児科 院長 | 鈴東 昌也



新年あけましておめでとうございます。

このたび、鹿児島市医報への寄稿という光栄な機会をいただき、心より感謝申し上げます。また、本年の干支である「午年」の年男として、地域医療への新たな決意を述べる場をいただけたことに、深いご縁を感じております。

私は1978年生まれ、この原稿が皆様のお手元に届く頃には48歳となり、ちょうど5度目の「年男」を迎えます。世間では、この40代後半という年齢を「人生で最も幸福度が下がる」時期などとも言われますが、私にとっては、医師としてのキャリア、そして人生観を改めて見つめ直す、意義深い節目となりました。

午年の飛躍と「塞翁が馬」の教え

実は、小さな頃の私は、午年である自分が好きではありませんでした。熱狂的な阪神タ

イガースファンだったため寅年生まれの姉が羨ましく、空を駆け昇る辰年など、もっと格好いい年に生まれたかったと思ったものです。

しかし最近、自らの性格やこれまでの歩みを鑑みるにつけ、私こそまさに午年だと感じることが増えました。午は、臆病な気性と荒々しい面を持ちながら、いざという時にこそ目標に向かって力強く「飛躍する」という特徴があります。この奥ゆかしいエネルギーに、私自身の人生が重なるように思えてなりません。

思えば、この午年の節目は、私にとって常に大きな転機をもたらしてきました。

2度目の年男（12歳）では中学受験の不合格を経験し、挫折を知りました。3度目（24歳）では医師国家試験合格という最高の喜びに浸る一方で、鹿児島大学小児外科入局後にIgA腎症を発症し、長期入院を余儀なくされました。4度目（36歳）で待望の一人娘を授かり、親としての責任と無上の喜びを知りました。そして、この5度目の節目で、かねてからの夢でありました「すず小児科」を開業するに至りました。

これまでの人生を振り返り、痛感するのは、まさに「人間万事塞翁が馬」という言葉の深さです。この言葉は、恩師高松英夫先生が小児外科教授の退官の際、最終講義でお話しになっていた言葉でもあります。一見不幸に見える出来事が、時を経て未来の幸運の種となり、その逆もまた然り。この開業も、これまでの全ての経験が、最良の形で結実したものだと信じています。

地域に根差す「内科外科問わずなんでも相談できる小児科」

長年の臨床経験の中で、常に感じてきたことがあります。それは、子どもたちの健康は、単なる病気の治療だけでなく、日々の生活、家庭環境、そして地域社会全体のサポートがあってこそ守られる、ということです。

歳を重ねるにつれ、自分の得意なこと、苦手なことがわかってきました。自分が最も社会貢献できて喜ばれるとは何かと考えた結果、外科も内科もみれる小児科クリニックだという結論に至りました。長く小児外科医として勤務しましたが、40歳を機に小児外科に転科し、研修医からトレーニングをやり直して、念願の開業を果たすことができました。これもひとえに、今まで出会った先生方のご指導のおかげです。

「すず小児科」は、そんな私の思いを形にし、2025年5月に開院させていただきました。当院の理念は、「子どもを中心に、利他の心を持ち、スタッフを大切にする」ことです。「利他の心」は、開業にあたり稻盛アカデミーで学ばせていただいた際、故稻盛和夫先生の言葉で特に印象に残りました。いかに人様に喜んでもらうかを真摯に追求し、日々の診療に邁進したいと思います。

地域連携と新たな誓い

開業前は上がり続ける建築費用と金利に辟易とする毎日でしたが、開業して半年が経ち、たくさんの子どもたちや保護者の方から感謝の言葉のシャワーをいただき、「開業して良かった」と囁み締める感無量の毎日です。

年男として、地域社会への貢献をさらに深化させるため、当院では2026年4月に「病児保育すず」を開設することにいたしました。

病児保育室は、お子様の急な発熱などで登園登校ができない時に、お仕事が休めない保護者の方の受け皿としての役割を果たします。子どもには、健康な時も病気の時も、ト一

タルケアを受ける権利が保障されています。すず小児科は病児保育を通して、病気のお子様に専門的な看護と保育を提供することにより、子どもの健康と幸福を守りたいと考えております。

午年は、目標に向かって勢いよく駆け抜け、邁進するエネルギーに満ちた年だとされています。私自身、この新たなスタートラインに立ち、これまでの経験と「人間万事塞翁が馬」の教訓を胸に、地域の小児医療へ一層貢献できるよう、力強く、たゆまぬ努力を続けてまいります。

会員の皆様におかれましても、本年が健やかで実り多き一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。今後とも何卒よろしくお願ひいたします。

